

# 誕生日の贈物

永代美知代

お花は山の中でも、特別景色のい、所に住んでをりました。家の後ろの裏山は青々と、見るからに氣持ちよく天に聳えてをりますし、前の方には鏡のやうに美しい湖水がありました。真白な鵜がすうい、すういとそこ、泳いでをりますと、人の背丈け程もあるやうな蘆の繁みの中を、いろんな水鳥が出たり入ったりして遊んでるます。

お花の母さんは貧乏で、いつも生活に追はれながら、働らかなければなりません。夏場になると、東京からお邸の奥様が、お子様づれで避暑にいらつしやるので、別荘番の母さんは、何彼と餘計に忙がしくなりました。お花は赤ん坊のお守りをしてしたり、お皿を洗つたり、いろ／＼お家の御用をして、少しでも母さんの手助けになるやうにしました。

お花は學校へ行きませんでした。お家から學校まで、一里半もあるんですもの、年のゆかない女の子の足で、一日二度づつ、三里の路はとても歩けません。兄さんの太郎から、少しづつ読み書きを教はりましたが、お花は始終今に大きくなつて、兄さんと一緒に學校へ通はれるやうになる日のことばかり考へてをりました。



お邸の奥様は、大層お花がお氣に入りで、別荘にいらつしやる間中、よく親切にお話をなさいます。或る日のこと、奥様はお訊きになりました。

「ねえ、お花坊は幾つ？」

「八つで御座います」

お花が答へますと、奥様は又おききなさいました。

「誕生日は何時？」

「誕生日？ ああ……誕生日つて何でせう？」

「お前さん、知らないの？」

奥様は、につこり笑ひながら仰有いました。

お花はきまり悪けにうなづきました。

「ではね、教へてあげようね、誕生日といふのはね、お花坊がうまれた、その日のことで、一年に一度づつ毎年廻つて来るんです」

「あら、それちや私七遍誕生日が来たわけね、だのに私、ちつとも知りませんでした」

「だつて誕生日の贈物を頂くでせう。お花坊は貰はないの？」

「いゝえ」

お花は頭を振つて云ひました。

「私、母さんから、お年玉を貰ひますけど、私の誕生日の贈物なんぞ頂いたことはありませんの」

物なんぞ頂いたことはありませんの」

奥様は、お花の母さんからおききなすつて、そのすぐ次ぎの月曜日が、丁度お花の誕生日に當ることをおしりになりました。

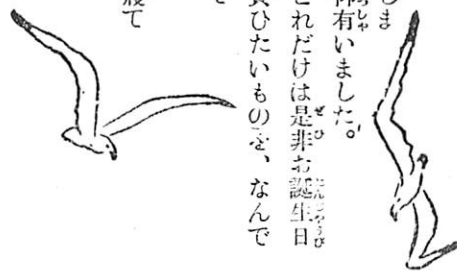
そしてその日が来ますと、奥様はギラギラ光つた五十錢の銀貨で三圓、贈物としてお花に下さいました。

母さんは、早速それを貯金させようとしましたが、奥様は仰有いました。

「いゝえ、どうぞ、これだけは是非お誕生日の祝ひに、お花坊の買ひたいものを、なんでも町の店屋で買はせてください」

ですから赤ん坊の寝てるるひまに、お花は町の店屋へ出掛け

る事になりました。町まではかなりな路で、女の子の足で歩いて行くと、どうしたつて二時間ばかりかゝりました。



でも歸り途はい、具合に、歩きませんでした。親切な車馬きに出逢つて、荷車の上につけて来て貰つたのでした。

「ソラ、来た！」

家の前まで来ると、お花はかう云つて、車を止めてくれました。お花は大きな手荷物を抱へながら、急いで家の中へ入つて来ました。ほつと襟色に顔が上氣して、眼の色が、いかにもうれしさに輝いて見えました。

「私、こんなに、どつさりいろんなものを買つちやつた！」

お前の顔を見るなり奥様云ひました。

「奥様に連れて来てい、こと？」

母さんがうなづきますと、お花はいそいそと、奥様のお席へ持ち込みました。

「奥様、買ったあのお金で、いろんなものを買つて来ましたの。どうぞ御覽なすつて下さいね。」

お花、荷物を其處に並べて、まづその中の一つを取り上げて、包み紙を破きました。

「これは玉子の泡立てですの、これさへあればもう、母さんはお庭で叩かなくても、わけなくお料理が出来ますわ」

お花は、また他の包み紙を破きました。

「これ随分立派でせう、父さんの麥帽子ですの。きつと、よ

「え、でも私、どんなにうれしかわかりません。みんな私の贈物なんですもの。だつて奥様、贈物つて、人にあげるのとなんでせう。ねえ、さうですわねえ、奥様」

「まあ何て可愛い子でせうね」

奥様は、いかにも可愛くて堪らないといつた風に仰有るの

「ほんたうにね、受くるより與ふるものは幸なり、お花坊

お前さんは本當にい、ことを教はりましたね」

その晩床に入つてから、お花は、ひとり心の中でくりかへ

しました。

「全くい、日だつたこと！ 私、誕生日つて大好きだわ、だ

つて私、今まで誰にも贈物なんぞあげたことないんですもの

一年に一度つづつ毎年来る誕生日つて、随分い、ものだこと！

お花は心から、自分かみんなに贈物をなし得たことをよろ

こんであるのでした。いままで、贈物をうけたこともないし、

また、いまだかつて贈物をしたこともないのです。それを、

奥様が光る銀貨を幾枚か下さつたのです。そして町にいつて

いままで自分ひとりで買物をしたことのない街々の店頭

に立つたとき、自分のものを買ふより、自分の好きな奥様や

兄に買物することがほんとにうれしかつたのです。

く都合だらうと思ひますわ」云ひながら、更に別の包みを取り上げて「これは赤さんのがらですの、それからこのナイフは大郎兄さんにあけますの、この桃色の状態は、奥様にも思つて買つて来たんですけど、あの、お氣に入りますんでせうか。ねえ奥様？」

「有り難う、結構ですとも」奥様は仰有いました。「でもね、お花坊、お前さん、そんなに他人にばつかりよこし

て、かんじ

ん要のお前さんの贈物に

は、なにを買つて来たの」

「私、あんなにいろんなものを買つたんですもの、澤山ですわ」

「オヤ、自分のものは、なんにも買はなかつたのかい」



朝があけました。

起きると奥様のところにとんでゆきました。爽やかな庭に奥様は、しづかに、草花

の手入れをしておいででした。

「奥さま、お早やうございませう」

「おはやう！」奥様は美しくお笑ひになりました。

「奥様、奥様が、夏になつて、こゝにいらつしやる時

分には、いつも私の誕生日がめぐつてくるのですわね、奥様」

奥様はうなづいてにつこりなさいました。お花は朝の光の庭に幸福

さうに微笑つてゐました。

